ルソーと中江兆民（下）

『民約訳解』における文化的の受容

佐藤誠

一九世紀末の近代日本は、欧米列強の軍事的圧力のために、数百年間続いた鎖国政策を放棄し、開国に踏み切りた。しかし当時の日本は、近代国家としての社会機構を十分に備えていたわけではなく、社会の代表者によって構成される国会も、開設されてはいなかったのであろう。こうした状況の中で、中江兆民が『治道の要』として、ルソーの『社会契約論』を高く評価したのは、人民主権に基づく理想的な統治機構の記述を、そこに見出したからである。すなわち、民を自らの自由を保持して国家の骨組を成すために、官の抑制する所を為るべき所を在する。視点を、中江兆民は『社会契約論』の前半部（最初から第二巻第六章まで）の翻訳であり、それに若干の注解を施した作品である。そして、訳文は、必ずしも原文に忠実ではなく、しかも部分訳であるために、『社会契約論』全体の説明をそこに求めることはできない。それでは、兆民はなぜ『社会契約論』を第
ルソーと中江兆民（下）

二巻第六章までしか訳出しなかったのか、この点に関して、井田進也氏は、『民約訳解』中段の理由を、『社会契約論』後半、『人民』の概念を、近代日本の政治状況との不整合性に求めている。つまり、後半部分に見られる『立法者』の説明や『人民』の概念は、近代日本の理想的な国家を構築するためには不適当だとは兆民自身が判断した、という解釈である。

しかし井田氏の解釈を受け入れるためには、兆民は、『民約訳解』の中でルソーの政治思想をどのように捉えていたのかを検討し、ルソーのいかなる政治的見解のために、彼は『社会契約論』全体の翻訳を中断させる必要がなく見なしたのかをある程度まで明らかにすることができるとのだろう。

そこで、本稿では、『民約訳解』の基本的な概念を検討しながら、中江兆民とルソーの政治的・社会的状況の中で、兆民は、なぜ『社会契約論』後半部分を翻訳する必要がないと見なしたのかをある程度まで明らかにすることができるとのだろう。

『民約訳解』は、近代日本の国家建設が進行している時期に執筆された翻訳作品である。当時の政府先進者諸国は、中江兆民とルソーの思想的立場を比較分析し、記述された国法や法律を参考にした。
ルソーと中江兆民（下）

で、「民の権」を重視したルソーの『社会契約論』を翻訳しながら、人民の意志に基づく理想的な国家機関を模索することになる。したがって、『民約諺解』の解釈は、当時の日本の政治状況を如実に反映していると考えられる。そこで、『社会契約論』の第三章から第五章までの、人民の権利を考察している。特に、人民は、自由権を保有しながら、共同体全体に寄与する「社会契約」についての基本的な議論を提起している。ルソーの解釈においては、「社会契約」の出発点を、人民の意志に基づくものであると解釈されている。
ルソーと中江兆民（上）

① 公民の翻訳方法（第一段階の問題点）

第一段階では、ルソーは、現実社会の批判を通じて、力による支配の不適当性を論証している。その場合、特に奴隷制度の成立が、そうした不適当性を証明する有力な根拠となる。すなわち、人間は、自分の意志に従って奴隷制度を受け入れたのではなく、物理的な力で形成されるわけではなくからである。物理的な力で形成されるわけではなくからである。「必要に迫られた行為」であり、いかなる権利をもそこに導き出すことはできない。権利は、常に自由意志を伴うルソーの重要な前提条件を成していることになる。したがって、奴隷制度を正当化するものは、現実の奴隷状態を盲目的に追認しているに過ぎない。

② グロティエスやホップズなどが、奴隷状態の成立を解明するわけではないのである。ルソーは、こうして、既成の発想方法を根底から批判しながら、奴隷状態の正当化は、人間の自由そのものを否認し、しかも「自己の自由の放棄、それは人間の資格や人類の諸権利や義務さえも放棄することである」と断言してはいる。人間の本性は、何よりも「自己の保存に留意すること」と断言している。

最後に、自由の存在に基づく自由統御こそ、自由な行動形態を示し、本来の道徳性は、その中に認められるのである。こうしてみると、ルソーが奴隷権の矛盾を暴き出したことは、人間の自由権に対する正当性を論証するための布石を成していることがわかる。力による支配の不適当性は、自由の価値を保証するために提示された。
ルソーと中江兆民

一方、「人遺の自由」は、「民あい共に約し、邦国を建

て度を設け、自治の制を興し、斯てて各の自の生を遂げ其の利を長するを得る行為を示し、『社会契約』

によって獲得して「公民的な自由」liberté citoyenneを意味する。そうした自由は、『人を難うるもの』だから、

『人義の自由』と見なされるのである。

人間に本来備わっている自然性を『天』の観念に結びつける兆民の発想は、家族の成立が問題となる第

一巻第三章の『あらゆる権力は神からくる』Toute puissance vient de Dieu、いうルソーの原文を、兆民は独

して人を難うものと解されることが強調されている。

兆民のそうした訳語に、儒教的な発想を認めることができるけれども、兆民の時代には、自然は、『天』や『天

然』という語と結び付けて表現されるのが一般的な慣例である。しかし、そのような用語は、必ずしも『民約説解』全体を通して同じ原語に適用されているのではない。したがって、兆民は独

自の用語を生み出したわけではなく、当時の慣例に基づいて、翻訳用語を採用したと考えられるのが妥当である。

天の意味内容は、その時、『自然』つて『神』のと
理想的な国家建設の視点を保持する兆民の翻訳態度は、こうして、『民約説解』の訳文に反映していることがわかる。

そこで次に、「社会契約」の成立過程が詳細されている第二段階に移り、第一段階で認められた兆民の翻訳態度がどのように貫かれているのかを考えることがあった。

ルソーは、何よりも、「自分を保存に留意する」とvouiller à sa propre conservationが人間の本性を特徴づけていることを指摘している。しかし、一人の人間が己を保存する能力には限界があり、その人間が己を越えた障害に遭遇する時には、個人相互の力を結集しなければならない。その場合、己の力と己を損ねずに、己の力の総和を同一somme de forcesを生み出すことが主要な課題となる。したがってルソーは、「社会契約」、「株式」、「社会の問題点」という点を取り上げている。兆民は、この箇所を「吾等安んですか相い倚りて一党を成し、其全力を頼りて以て生を保つを得ん」と疑問形に訳しているが、ルソーの主旨を十分に捉えていると言えよう。しかし、「結社形態」associationを一党に置き換えていて、契約の作用が明確に示されていない。

第二は、「結社形態」の性質が説明され、各人がすべての人と結びついているが、これは各人がすべての人と結びついていると言えよう。しかし、「結社形態」ma forme
ルソーと中江兆民との関係について述べた。訳者は「自由権」を強調するために、実に絶えて人の抑制する所と為されることなく、

以上の二点こそ、『社会契約』の成立にとって必要な条件となる。その場合兆民は、『社会契約』、つまり『民約』の意義は、『国の国を成す所以、民の民を成す所以、邦国の本』にするることであり、そこに人民、人民の国家を構想する姿勢を見ることができる。兆民は、そのために、『民約』こそ『義に原づき情に本づき、確乎として易う可からず』と述べて、『民約』の意義を高く評価するのである。

さて、ルソーが提示する二つの条件を具体的に実現させるためには、構成員の『全面的な譲渡』が要求される。

つまり、各構成員は自分の持つすべての権利ともに自分を共同体全体に譲渡すること、全面的な譲渡』は、その時、すべての構成員に対して平等であることが必要である。全面的な譲渡』は、こうして、共同体全体』の設定を生み出すべく、すわくである。

以上のような経緯から、ルソーは『社会契約』の本質的な作用を次のように定義している。すなわち、まず、
われわれの各々は、身体すべての能力を共同のものとして、一般意志の最高の指揮のもとに置くべき働きであり、これには「全面的な議論」そのものを意味する。次に、「われわれは、団体の中での各構成員を、分割不可能な全体の部分として受け入れて」ことが要件となり、共同体の構成員としての権利が、同時に保証されるのである。そのような二つの作用を備えた「社会契約」の定義は、「兆民は、人々を無差別者としての一人である」と訳していて、共同体の構成分が権利を獲得する部分は、文に示されていない。兆民によれば、人々は、あくまで「衆用」のために役立つことが重要であり、「衆意の同じく然なる所を以てする」と訳していて、共同体の構成分が権利を獲得することになる。兆民のこうした翻訳態度は、「社会契約」成立後の論述を訳す時に、より明確に表されるのである。

ルソーは、「この結社行為＝社会契約」を、直ちに各契約者を個人的な性格に代わって、一つの複合的な倫理的性格を作り出す」と述べて、公民の誕生を提起している。この「複合的な倫理的性格」とは、家庭である公民を意味し、単なる民衆を指しているわけではない。実際、ルソーは、「エミール」の中で、「家族が社会と交渉を持つのは、家族の身分だ」と述べているし、また、「新しいイブリズム」としてルソーが、「その倫理的性格が集会における投票者と同数の構成員から成り、この同一結社行為から、それぞれの目的」を達成するためのものである。
ルソーと中江兆民(上)

の統一、その共通した人格、その生命、その意志を受けとる」と付け加えているのは、家長たちによって成り立つ共同体を想定しているからである。

「社会契約」の土台を成すこの部分は、兆民訳によれば、「是の体や、議院を以て心腹と為し、律例を以て気血」と為し、斯くて以て其の意思を宣暢する者なり。是の体や、自から形を有せず、衆身を以て形と為す。自から意を有せず、衆意を以て意と為す」となっている。

「議院」や「律例」の設定が、国家建設に不可欠な要因であることがこの訳文で指摘され、力点は、あくまで「衆身」や「衆意」という全体的な概念に置かれている。確かに、そこには、個が全体に包摂される働きは、表層的な現象に過ぎず、家長による共同体を想定した「社会契約」では、主體は家長である点を忘れてはならない。ルソーの発想は、むしろ、家長である構成員としての相互作用だって捉えられていない見なす方が妥当であり、決して一方が他方を傷つければ、必ず構成員たちの恨みを買うことになると考えたルソーは、そのために、「この多数者がこのように集合して一つの団体を作る」とすなわち、一人でもその構成員を傷つければ、必ず団体を攻撃することになる。その結果、構成員と共同体との相互作用は、義務と利益とが等しく双方の契約当事者を縛り、相互に助け合うようにさせる。そして、同じ人々が、この二重の関係のもとで相互扶助に基づくあらゆる利点を結びつけようと努めるに違いないと言える。
は補足して、「相互に助け合う」を、「entre-aider mutuellement」ことを重視するのである。したがって、個と全体は、相互的な関係にあり、ルソーは決して安易に個を全体に包摂する発想を取り入れているわけではないことがわかる。

ところで、国家統治の視点からルソーを解釈してきた兆民は、そうした叙述部分を、次のように解釈している点に注目しなければならない。すなわち、『社会契約』の相互作用をルソーが記した箇所は、「凡そ此の約に与る者は、その君たるて令を発すると臣たるて命を承くると、並びに常に相い共に助を致さざる可らず。是れもより義の在る所にして、赤利の存する所なり。君たるて令を出し、能く義に違わざるか、臣たるて必ず之が福を獲ん」となっている。

ルソーの原文では、『君』に相当する「主権者souverainも、「臣」にあたる「臣民citoyenも見当たらない。しかし、全体と個との相関関係を、『令を発する』働きをする『君』と『命を承くる』役割をする『臣』という上関係に置き直しているのは、当時の読者に理解させることには、訳者が伝統的な君臣関係を導入した考えられることである。実際『民約』に対する兆民の考えにも、同じ発想を見出すことができる。ルソーは、『結社行為は、公衆人一人』と個々人との間の約束を含む』と述べているが、兆民はそれを「是れ君と臣と交しも盟って成す所なり」と訳し、君臣関係を設定している。こうしてみると、『社会契約』を結ぶ構成員の能動的な行為は不明瞭にならざるをえない。もっとも、兆民は、ルソーの原文に従って「君なる者は、衆を合して成る」と訳して、「君」は構成員
全体の意志を表象していることを忘れていらない。しかも、「君」は決して単なる支配者を意味しているわけではない。「君」は十分に理解しているのである。それにもかかわらず、「君」や「臣」という詮語には、上下の主従関係を含む発想を認めることができ、そうした詮語を用いる限り、個と全体との緊密な相関関係を重視するルソーの思考様式を明確に表すことは非常に困難となる。また、「社会契約」によって成立する都市国家Citoyensというルソーの用語は、それぞれ「国」と「市民」（または「士」）に詮されていることに注目する必要がある。「民約説解」には詮出されていないけれども、ルソーは初卷第六章で都市国家Citoyensについて、「このCitoyensという語の真の意味は現代人の間では、ほとんどの見失われてしまっている」と述べている。確かにCitoyenは都市の意味を含むが、ここではむしろ、国家共同体を指し示し、「共和国」または「政治体」corps politiqueと同義語である。ルソーは、まさにそのために「多くの人は、都市Citoyenを都市国家Citoyenと、ブルジョワbourgeoisieを市民Citoyensと取り違えている。都会をつくるのは家屋だが、都市国家は市民がつくるものであることを、彼らは知らない」と指摘して、公民の概念を想定しているのではないことを忘れていらない。
こうしてみると、「社会契約」の成立に関する兆民の翻訳態度は、近代的な統治国家を想定する視点から逸脱していないことがわかる。しかし、ルソー自身は、実際にはそのような視点から理想的な国家共同体を構想していたのかについては、議論の余地がある。そこで、ルソーと兆民の発想方法を明らかにするためにも、近代国家の視点から議会政治の理念を提示した第三段階の説を考察しなければならない。

③ 主権と統治形態（第三段階の問題点）

「社会契約」の成立基盤は、一般意志の設定であり、一般意志は、公共の利益に関する構成員全体の意志を表象することができるという文章が示しているように、一般意志は「公共の福祉」を実現する働きをする。しかも主権は、一般意志の設定から、人間社会においては、すべての構成員が、必ずしも常に同一の意志を表明するとは限らない。ルソーは、こうして、一般意志の設定から、人間社会においては、公共の利益とは異なる個別の利益を示す「特殊意志」に従属すること、一般意志そのもののが公共的利益を否定することになる。そこには、特殊意志が介入する余地は全くないからである。

ルソーは、そのために、支配者が現れた瞬間に、もはや主権者はいなくなり、そのときから政治体は破壊される。
ルソーと中江兆民

この部分では、ルソーの思想がより詳細に説明されている。とりわけ、ルソーの思想が政治や社会の構造にどのように影響を与えたかについて、中江兆民が考察している。

特に、ルソーは「人間平等起源論」を提出し、社会が不平等を生む根拠について考察している。中江は、この思想が社会の不平等を解消するための基盤になることを強調している。

さらに、ルソーは、社会を自分たちで作ることが必要であるとしている。これは、中江がもつ思想にも共通する点で、個人が社会を変える役割を果たすことの大切さを示している。

ルソーの思想は、その時代の社会や政治の問題を克服するための道筋を提供するものであるが、中江の解釈は、特にその思想を現代社会への適用に結びつけるものである。

全体的に、中江の解釈は、ルソーの思想が現代社会にどのように影響を与えるかを明示している。
ルソーと中江兆民（下）

なお、『衆おの私に党を樹く相い約して成議を執る有れば、則ち此の議や、其の党よりして言えば則ち公と為すも、挙国民よりして言えば則ち私たるを免れず』と、兆民は訳し、政党的の派閥を想定した実際的な表現内容となっている。

実際、兆民は『東洋自由新聞』で、かつて政府を厳しく批判し、その弊害を取り除くために、国会を開設することが必要であることを主張している。しかし、たとえ国会が開設されても、衆のの私に党を樹く相い約して成議を執る有れば、国民全体の意見は反映されず、党の党略に基づく特殊意志が出現するだけである。そして兆民は、『殊勝な意見』が『特別の通則』と書かれたルソーの言葉を、『党首の私志』として用語に置き直し、現実的な議会制度の観念を導入した訳文を作り出している。すなわち、ルソーの原文を敷衍しながら、兆民は、皆な議院の必要を得るために非ざれば、視て公志と為す可からず。己に議院の允政を得れば、是れ亦た挙国の志さつ之と訳して、一般意志の成立には、議院の允政を獲得することが必要となる点を指摘するのである。

この翻訳態度は、立法権と執行権の説明においても見出せることができ、兆民は『令を造るの権は議院ごとを掌る』と訳して、議会制度の発想を取り入れている。むろん、兆民が『民約訳解』を執筆した時点では、国会はまだ開設されていなかったために、当時の社会の中に議会政治の具体的な事実を証証することはできない。したがって、兆民は、ルソーの文章を読み解きながら、日本の来るべき議会政治の具体化の形態を予告させする訳文を作り出していることになる。確かに、それからの訳文は、ルソーの原文と照合してみ
「普遍的で強制的な力」

それは、国家共同体が成立するためには、特殊意志や全体意志を取り除くばかりではなく、構成員全体に対して「普遍的で強制的な力」を課すことが必要である。つまり、国家共同体は、その全体の利益を、家庭を、支配する社会機構として、全体の統治形態に重点が置かれることになる。そして、国家共同体は、その内面、構成員が全体の利益に寄与することを必要としている。ルソーの理想的な社会機構は、家族によって成立した国家共同体であり、その中で、構成員が全体の利益に寄与することを必要としている。
ている。このような訳語や文の混乱は、ルソーの思考内容を当時の近代日本に移植するがいかに困難な仕事であるかを物語っている。

しかし、例えば、「一般意志」と「特別意志」の対立を具体的に説明する兆民の訳文は、現実の政治形態を、原文以上に生き生きと描き出すことに成功していることも認めなければならない。

兆民は、当時の政治事情を考慮して、あくまで特定の党派が形成されるすることを危惧し、特別意志に関わる限り、君権の否定に至ることを指摘して、次のような説明を付け加えている。すなわち、「一君を総統官を選び、及び人を賞し、罰するの類は、その利害は独り一人もしくは数人に関るのみ。他の人では別にかかる事は、皆君権の預るところに非ずして、特だ吏士の職のみ」と。

こうした文章は、「立法原則」により種類が形成されつつある当時の日本に対する痛烈な批判となっている。

そこで、本稿の冒頭で指摘したように、「民約説解」は、「社会契約論」第二巻第六章で中断されている。そこでは、その中断理由を考察するためにも、最後に、法律の特質が論述されている第二巻第六章の訳文を検討しなければならない。
ルソーと中江兆民

初めより党を分うこと有ること無し。夫れ然して後、其の発する所の志と其の決する所の事と、並びに公にして私に非ずと訳している。ここので、人民は「国民」に置きかえられ、法の公的な性質が強調される。法文を書き記すのであ

ルソーが、特殊意志の行為に言及しながら、「特殊な対象に関する全ての機能は、立法権に属さない」と述べる。この文を「凡そ事の独り一一人もしくは数人の利害に関するものは、現実の政治形態を想定しながら、訳文を書き記すのであ

実際、ルソーが、「特殊意志の行為に及ばずながら、「特殊な対象に関する全ての機能は、立法権に属さない」と述べる。兆民の発想を、そこに見出すことができる。

同様に、「主権者でさえ、特殊な対象について命じたことは、もはや法ではなくて命令であり、主権の行為では、

ルソーは、「共幹国」の定義に関する文章である。共幹国は、立法者による統治された国家で、その政治形態がなんであろうと、すべて共和

ルソーは、「共幹国」について、「法律によって統治された国家を、その政治形態がなんであろうと、すべて共和

国民と呼ぶ」と述べ、「共幹国」が、法律の利益や、法律の事情を実現する法律によって支えられていること
を指摘している。兆民は、その箇所を、「若し一邦ありて、独り律例の束する所を被りて其の他を知らざれば、余
は必ず之を自治の国と日わん」と訳し、人民が自ら統治する点を重視するのである。そして、「凡て政の理に合す
るもの、皆な自治の政となす」と兆民は書き記して、「共和国」である「自治の国」を、理想的な政治形態と見な
している。

このような訳文に加えて、訳者は更に、原語の『共和の国』を説明し、独自の見解を主張することになる。すな
わち、兆民は、「列士彪利は即ち公務の義、猶民の事と言わんがごとし、一転して邦の義を成す」と述べ、『列士彪利
を弘民の事』に結びつけて、説明している。理想的な国家建設にとって、民すな目から律例を為為するの権を操る
ことが要件となり、そこには、憲法の作成に対する兆民自身の理念を認めることが出来よう。

実際、兆民は、「東洋自由新聞」の中にも、理想的な政治形態を述べた記事を掲載し、「民約訳解」と同じように、
「共和国」の定義を試みている。そこで、『共和政体』は、「国政を以て全国人民公有物と為す、公有物を為す
ヨ推シテ之ヲ政体ノ上ニ及ボシ共和共治ノ名ト為セルナリ」に置かれ、あくまで人民の私有物を為すニ為セルナリ
として捉えている。そして兆民は、「私有物ヲ為シニ有司ニ私セザルトキハ、皆ノレ

スピュリカーナリ。皆ノ共和政体ニ為セルナリ」に置かれ、あくまで人民の『和解調整』を行なうと、兆民は
考えている。君主の権力を、こうして制限するために、兆民が提案する「君民共治」は、理想的な統治機構を持っ
ルソーと中江広民（上）

ことになる。「君民共治」では、何よりも人民が主体であり、君主は、人民全体の意志を調整する代表者に過ぎないものである。そうした統治機構が、「共和国」つまり、「自治の国」理想的な政治形態に他ならない。民は、自ら選挙スセルノ宰相ヲシテヲ執行セシメば、政治立法ノ権並ニ人民ノ共有物ヲナリと断言することに見える。

しかしながら、ルソーは必ずしも人民に全権の信頼を置いていけるわけではない。第二巻第六章の末尾で、「先が見えない大衆は、何が自分たちのためにされるかを知ったに知れないから、何を望んでよいのかが分からないことがよくあるのに、彼等は一体として、体系的な立法というような、あのような巨大で困難な大事業を自力で遂行しうるだろうか」とルソーは述べて、人民の能力をむしろ質問するのである。人民全体の意志を正確に捉え、しかも政治体を正しく機能させるような展望を持つことは、確かに至難の課題かもしれない。しかし、ルソーが示した見解をもっていうのであれば、「人民の権を有することを明らかにする」という意図を抱いて、「社会契約論」の翻訳に取り組んだ兆民の決意を、ルソーは、人民の教化を重視するのである。そして、人民全体の意志を適切に導くのは、卓越した能力を備えた「立法者」（兆民の用語では「制作者」）であり、「立法者」こそ、法律の完成に相応しいことになる。
しかし、立法者は、決して支配者ではなく、立法権を持っているわけではない。立法権を確認するのは、あくまで人
民であり、立法者が一般意志に反した法律を作成することは不合理となる。したがって兆民も、一例例を建立する
は民の事にして、律例を為すのは制作者の事なり。蓋し制作者は民の托を受けて律例を為し、之を民に授く。

民は従って著して邦典と為す。それと説明し、「制作者」は、「市民の托を受けて」法律を作成することが要件となる。

しかし、「前章（第二巻第六章）は文義きわめて糾緒。読者おぞらく解し難きに苦します」と、訳者が自身が打
ち明けているように、兆民は、ルソーの論旨を正確に把握した確信を必ずしも抱いているわけではない。それが、
果たして兆民によるルソー理解の不十分さに由来するものか、あるいはまた、自らルソー理解の困難さを意図的に
表することが、理想的な政治形態を近代日本に紹介するためには、「立法者」や「市民」に関する叙述はむ
いぞれにせよ、「民約説解」は、第二巻第六章で、突然中断されているのであり、訳者は、暑さによる「神気疲
困」のために、それを中断したとは考えにくい。もちろん、当時の政治事情を考慮に入れることも重要だが、その
前に、「社会契約論」全体を検討しながら、ルソー自身の基本的な思考様式を明らかにすることが要件となる。そ
したがって、兆民が捉えたルソー像と本来のルソー像との間に、どのような相違点が認められるのかを詳細に検討

ルソーとミotics (上)
ルソーと中江兆民（上）

四四

ということは、近代日本思想史における『民約訳解』の歴史的意義を正当に評価するための前提条件となる。『社会契約論』の部分訳である『民約訳解』の訳述だけに基づいて、兆民的思想的立場を論ずることは、『東洋のルソー』という人口に膿瘍された兆民の政治思想を十分に捉えたことにはならないだろう。

時、思想的な観点からある程度まで論究することができると思われる。

そこで次に、『社会契約論』を検討しながら、ルソーの基本的な思考様式を考察する段取りである。

当時、ドイツから帰国した伊藤博文に対する批判こそ、『民約訳解』の翻訳を『中江兆民全集』（以下『全集』と略称）第一巻、岩波書店、一九八七年刊、一九〇一九三頁。井戸田氏は、兆民の『国会議』を引用して、ルソーの基本的な思考様式を考察する段取りである。

注

『中江兆民全集』（以下『全集』と略称）第一巻、岩波書店、一九八七年刊、一九〇一九三頁。井戸田氏は、兆民の『国会議』を引用して、ルソーの基本的な思考様式を考察する段取りである。
日本の農業政策についての研究は、特に「経済学」や「国際経済学」の分野で研究されている。

例えば、Roussel et al. (2016) は、日本の農業政策が経済成長にどのように寄与しているかについての研究を行っている。

また、Roussel et al. (2016) は、日本農業政策の変化が世界経済に与える影響についても論じている。

これらの研究は、日本農業政策の理解を深め、将来の政策を考える上に重要である。
ルソーと中江兆民（上）

「全集」第十一巻、一八五～一八六頁。同右、一九四頁。

Rousseau: *Du Contrat social*, op. cit., p. 379. 同右、一九六頁。

Rousseau: *Du Contrat social*, op. cit., p. 379. 同右、一九七頁。同右。同右、第十四巻、十一頁。

「全集」第一巻、一九六頁。同右。同右。同右。同右、一九五頁。同右。一九五頁。同右。一九五頁。同右。一八四頁。同右。一八五～一八六頁。
ルソーと普通民（上）

を改め、自由観の意義に従って、君民同治の政体を定め、以て今日に伝へり（前掲書、一七〇頁）。

実際、ルソーは、法律を起草する者は、ながらの立法権を持たないし、また持っているわけではない。そして、人民自身は、

の講演できない権利を、たとえ捨てていても捨てることができない。なぜならば、基本契約によれば、我々を拘束するの

は一般意志だけでなく、一人の意志が一般意志と一致しているかどうかは、その特殊意志を人民の自由な投票に付したあ

とでなければ、決して確かめることができないからである（Rousseau: Du Contrat social, op. cit., P. 388）。

同右、一九〇頁。